

Title	人物展示の観点からみた大学アーカイブズ構築資源の活用： 明治大学での実践を踏まえて
Sub Title	A study on the utilization of university archives resources from the perspective of people-focused exhibitions : based on the practice at Meiji University
Author	村松, 玄太(Muramatsu, Genta)
Publisher	慶應義塾福沢研究センター
Publication year	2022
Jtitle	近代日本研究 (Journal of modern Japanese studies). Vol.38, (2021.) ,p.75- 114
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集：学校史の展示とその展開
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10005325-20210000-0075

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

人物展示の観点からみた大学アーカイブズ構築資源の活用

——明治大学での実践を踏まえて——

村松 玄太

はじめに——大学アーカイブズと展示

本稿は、大学アーカイブズにおける人物展示をめぐって、筆者の所属する明治大学での実践を踏まえながらその目的や手法を提示するものである。併せて大学アーカイブズにおける人物展示の成立経緯や、所蔵する人物関係資源の概要についても紹介する。

最初に日本の大学アーカイブズにおいて、展示総体がどのような位置づけであったか少しく触れておくことにする。

近年大学アーカイブズにおいて、常設の展示室を有し、展示を事業の一つとすることが増えてきた。しかしまだ展示に関して、大学アーカイブズ独自の定見を見出した状況とはいいい難いと筆者は考えている。その理由は日本の大学アーカイブズの主要事業の一つとして、展示が組み入れられたのがここ二〇年程度と比較的新しいためである。類縁組織である博物館や美術館に匹敵する施設も設置されつつあるが、率直にいえばまだノウハウを蓄積しているさなかだというのが実情であろう。

「ポスト年史編纂でない大学アーカイブズ」⁽¹⁾も置かれ始めたものの、そもそも日本の大学アーカイブズの方は、大学沿革史編纂事業にそのルーツがある。第二次大戦後、明治時代初中期設立の大学を中心に、創立一〇〇周年など節目の時期を⁽²⁾といた組織的な大学沿革史編纂事業が開始された。編纂事業がピークを迎えたのは一九八〇年代である。一九九〇年代には多くの大学で大学沿革史編纂事業は完結を迎えていく。

この時期、大学史に関する常設展示施設を有する大学は、一九八四年開設の日本女子大学成瀬記念館、一九八八年設置の成蹊学園資料館などを先行事例として挙げうるが、この段階では大学史に関する展示を目的とする施設はほとんど例がない。

沿革史編纂を推進してきた大学の多くで、編纂で蓄積した資源の活用が日程にのぼってくるのは、これに相前後する時期であった。あくまで沿革史編纂は時限の事業である。事業完結後それを推進していた担当セクションは廃止される。膨大なエネルギーと予算を費やして構築してきた資料や知見はどうするのか。散逸する危険があるこれらをどのように活かしていくか（あるいは幕を引くか）が各大学の課題となった。かくて戦後の「文書館運動」として知られる史料保存運動や個人情報保護法、公文書管理法の制定とも連動しながら生まれた解の一つが、各大学における大学アーカイブズ、あるいは相当施設の設置に向けた動きであった。⁽³⁾

これまで各大学でなされてきた沿革史編纂事業は、およそ以下のように整理できよう。①沿革史執筆、②学内記録資料の移管・整理・保管、③卒業生資料など歴史資料の収集・整理・保管、④大学史に関する調査・研究である。ここには⑤学内外へのレファレンス対応なども含まれる。しかしあくまで主務は①から④までの親機関の沿革史編纂にかかる事業であり、⑤はそのなかで副次的に生じたものであった。

それに対して、大学アーカイブズでは、構築してきた資料と知見（筆者はこれを「大学アーカイブズ構築資源」と呼称している。⁴）以下の公開が主眼となる。沿革史編纂の経験をとおして構築した資源である②③④の永続的な保存、そしてそのさらなる構築を図りながら、沿革史編纂期間中は限定的なレファレンス対応のみであった資源の活用を拡張させ、内外に広く公開することを目的に据えることとなったのである。

ただ一口に資源の公開といっても、その方法は様々である。従来のレファレンス対応も公開であるし、現在かなり多くの大学で定着した「自校史教育」⁵も公開の一環に位置づけられよう。そして沿革史編纂以外の大学の営みに関連する刊行物の編集や、大学の歩みに関わる各種イベントでの資料の利用も公開といえる。もちろん本稿で主題とする展示も公開手段の一つである。

しかし展示については、その他の公開手段と比べると、各大学への普及には時間を要した。レファレンスは沿革史編纂時に行っていたことの延長で対応が可能であるし、自校史教育は、主として無形の、大学史に関する情報を資源化してその公開をはかるものである。それに対して展示は、展示に関するノウハウはもとより、展示会場の確保や、展示列品にともなう各種造作のコストが必要となる。これらの点が大学アーカイブズにおいて展示が普及するまでの障壁になっていたといえる。

しかし二〇〇〇年代以降、展示施設を有する大学アーカイブズが数を増しつつある。大学アーカイブズによる展示施設や、大学史を展示の主題の一つとする大学博物館等のおもな開設状況をみてみると次のようになる。

- 二〇〇〇年 京都大学文書館（常設展設置は二〇〇三年）
- 東北大学史料館
- 二〇〇二年 駒澤大学禅文化歴史博物館
- 二〇〇四年 明治大学大学史展示室
- 二〇〇六年 関西大学年史展示室
- お茶の水女子大学歴史資料館
- 二〇一三年 ハリス理化学館同志社ギャラリー
- 國學院大學博物館
- 二〇一四年 立教学院展示館
- 東北学院史資料センター
- 創立者・神奈川大学史展示室
- 二〇一五年 帝京大学総合博物館
- 二〇一八年 早稲田大学歴史館
- 二〇二〇年 HOSEIミュージアム

二〇二一年 福澤諭吉記念 慶應義塾史展示館

そしてこの他に、常設展示施設を持たなくとも、学内の施設を時限的に活用したり、博物館等と連携して企画展示を実施したりする大学アーカイブズも出てきている⁽⁶⁾。

このような状況を受けて、大学アーカイブズの連合組織である全国大学史資料協議会が主催となり、二〇一〇年に七〇あまりの大学および機関共催による大規模な大学史企画展「日本の大学——その設立と社会」を開催した。この実施は、二一世紀に至り、展示が大学アーカイブズの事業として定着しはじめたことが背景の一つにあった。大学アーカイブズ（主催 全国大学史資料協議会東日本部会）による共同展示は、「学生たちの戦前・戦中・戦後」（二〇一五年）、「新しい大学」の誕生——今日の大学の原点をさぐる——」（二〇一九年立教学院展示館との共催）と継続している。

かくてようやく大学アーカイブズが、資源公開の一環として、展示という手段を獲得しつつあるのである。しかし冒頭で述べたように、大学アーカイブズにおける展示の意義を定式化していくためには、いままじ経験の蓄積が必要になってこよう。本稿では以降、人物展示とそれにまつわる人物関係資源について筆者の知見・経験を述べ、その蓄積にいささかの貢献を図りたいと考える。

一 収集アーカイブズへの偏り

——大学アーカイブズの展示テーマに人物展示が多い理由

大学アーカイブズの展示には、どのような主題が扱われるのであろうか。全国大学史資料協議会東日本部会が会員の大学に対して二〇一三年にとったアンケートによると、もともとオーソドックスな展示が、大学沿革史の編年展示である。編年展示は、多くの大学アーカイブズにおいて行われている。これが大学アーカイブズにおける展示の基礎となる。

それに加わるのが、各大学で重要と考えるトピックスを公開するテーマ展示である。テーマ展示は常設展示の一部として組み込まれることもあるが、いわゆる企画展示として実施するパターンもある。テーマ展示において取り上げられることが多い主題には以下のようなものがある。①大学にかかわる人物、②キャンパスライフ、③キャンパス施設、④戦時下の大学、⑤大学と周辺地域、⑥付属校、⑦その他（国際化、大学の特徴ある研究、テレビドラマなどで大学関係者が取り上げられる際の連動展示など）⁽⁷⁾等である。また近年ではオンラインピックや大規模スポーツイベントの開催時期にあわせ、大学スポーツ展示を実施する大学などもみられる。

なかでも、①の「大学にかかわる人物」を主題とした展示を実施している大学アーカイブズがきわめて多い。ここでいう人物とはおおよそ創立者、教職員、著名卒業生、現役学生の四種類である。わけても創立者に関して取り上げられるケースが多くの大学アーカイブズにおいて見られる。

なぜ大学アーカイブズの展示において、人物展示の比率が多くなるのだろうか。いくつかの理由が考えられ

る。とりわけ創立者については、大学の草創期を主導したばかりでなく、その理念の継承により、のちの大学のあり方を規定しており、大学の歴史を考える上できわめて重要であるから、という理由がある。筆者は、ほかにもう一つの理由を見出している。理由といってもきわめて単純なものである。そもそも大学アーカイブズに人物に関する資源が多いから、というものである。

大学アーカイブズに人物に関する資源が多いのはなぜか。それには大学アーカイブズが所蔵する資源の内容を考えてみる必要がある。大学アーカイブズには大学各部署から移管された、大学の営みを拳証する記録である「組織（機関）アーカイブズ」と、大学以外の団体や個人から集めた「収集アーカイブズ」がある。欧米のアーカイブズ学というアーカイブズとは主として前者を指すが、日本では必ずしもその考えが定着しているわけではないとされる。⁽⁸⁾

とくに人物関係資料の大部分は、後者の収集アーカイブズにカテゴライズされる。もともと大学アーカイブズ以前の日本の沿革史編纂においては、組織（機関）アーカイブズより収集アーカイブズに軸足が置かれていたところが少なくない。筆者の所属する明治大学もその例外ではない。

収集アーカイブズを主としているのは、まず先に述べたこととも関わるが、沿革史編纂時に、収集アーカイブズに含まれる、創立者をはじめとする大学の創立や発展への貢献が大であった人物を調査し資源を蓄積するというミッションが優先されたことが関係しているのは確かであろう。

しかし実態として、多くの大学アーカイブズにおいて、組織（機関）アーカイブズの残存状況が思わしくないことが、収集アーカイブズに拠らざるを得ない大きな原因となっていると筆者は考える。結果的に大学外の個人、とりわけ、創立者や、大学の画期となる時期に有力だった人物やその遺族に当時の状況について照会し

たり、資料を求めたりするケースが多くなる。さらには、それらの人物に関係する学外機関（企業や故地の資料館等）に調査に赴く場合も多い。確かにこれらの人物やその遺族が所蔵する資料から、大学の運営に関わる各種記録を見出すこともあり、組織アーカイブズの代替となることもままある。こういった背景により、日本の大学アーカイブズの多くが、収集アーカイブズを重視する（あるいは拠らざるを得ない）傾向があると考えられる。

また、組織（機関）アーカイブズに理解がある教職員が、親機関の大学に決して多くないことも資源構成に影響を及ぼしていると思われる。全学的な協力が必須の組織アーカイブズに関心や理解が得られなければ、その整備は困難である。加えて沿革史編纂や大学アーカイブズに主導的な立場にある教職員や担当者が、組織アーカイブズへの関心が薄い場合、力点が収集アーカイブズに置かれがちである。これらが大学アーカイブズにおいて、収集アーカイブズでかつ個人資料の比重が増える理由ではないだろうか。

大学アーカイブズの展示は、必然的に大学アーカイブズの有する資源に規定される。以上が、展示主題に人物が選ばれる大きな理由の一つになっていると考えられる。

もちろん大学アーカイブズとしては、今後組織（機関）アーカイブズ構築も図っていかねばならない。とはいえ収集アーカイブズが過半というのが大学アーカイブズの一面の実態でもある。べき論に囚われず、現状の資源の偏りも良く言えば（個性）と捉え、それぞれの大学アーカイブズの使命とマッチした事業と、資源公開手段としての展示を考える必要がある。

二 大学アーカイブズで所蔵する人物関連資源と今後の収集方針

大学アーカイブズには人物に関するどのような資源があるのか、少し触れておきたい。先に述べたように、人物は①創立者、②教職員、③著名卒業生、④現役学生に区分される。資源の収集元は本人、遺族、人物の資料を収蔵している機関（複写も含む）等である。資源にはおよそ以下のようなものがある。

- A 文書（書簡・自筆原稿・書幅・人事賞罰書類（辞令・褒状・勲章類）等）
- B 蔵書（自著・人物の専門分野に関わるコレクション等）
- C 物品（筆記具・衣服・所蔵美術品・嗜好品類等）
- D 教育研究資料（人物が教員である場合、その教育・研究に関わる資料、学生なら講義筆記ノートなどの教育実態を明らかにする資料）
- E 大学運営に関わる各種資料（会議体資料や施策プロセスが明らかになる資料）
- F 学生が出場した各種大会での褒状・メダル等
- G 教育成果物（卒業論文・制作物等）
- H 特定の歴史的事項を明らかにする資料（学徒出陣等）

AからDまでは人物①から③の旧蔵資料が当てはまる。Eの大学運営に関わる資料は創立者、教職員が主と

して旧蔵していた資料である。Eは大学の会議体の資料や、折々の施策の背景を明らかにするメモや構想などが含まれている場合もあり、組織（機関）アーカイブズを部分的に代替する資料である。FGHは主として学生に関係する資料である。

これらの人物関連資料を資源化する際につねに問題となるのが、どこまで収集するのか、という問題である。近年筆者のなかで大きな課題と考えているので、あえてここで一言しておく。資料群の体系性を保持するためには、当該の人物に関する資料を一括保存し資源化することが望ましいといわれる。筆者も事情が許せばそれに異論はない。

だが、近年筆者は、以下の懸念が取り除けない限りは、収集アーカイブズの構築は慎重にすべきだと考えるようになってきた。懸念は三点ある。第一に、大学側に、当該人物や資料によるほど関心がある担当者や研究者がいなければ、往々にして資料の大部分が活用されず死蔵されてしまう危険性があること、第二に、無限定に受入れを図ると、限られた大学アーカイブズの収蔵スペースが圧迫されること、第三に、人物資料の収集基準はその時期の担当者や大学施策の影響を受けやすく、統一的な基準を設けにくいこと、である。

筆者は第一の懸念がもつとも重要と考える。いつか役に立つと考えてできるだけ資料を受け入れるのは良いことと思われるかもしれない。しかし収集時にその利活用をイメージできない、あるいは利活用できる担当者や研究者に心当たりがない資料を、人的・収蔵施設のリソースを考慮せず受け入れるのは、資料の死蔵化につながるだけではなく、いたずらに収蔵施設を圧迫させることになる。それはまだ成立して間がなく、施設もスタッフも十分ではない大学アーカイブズの将来に対して無責任な行為になるのではないか、と考えるようになってきたのである。収集アーカイブズの利活用は、ひとえに当該資料に関心と情熱のある人材を得られるか

にかかっているといえる。

逆に、利活用ができる資料と想定されるにもかかわらず、現状の施設とスタッフから逆算して受け入れを図らないのも早計に過ぎる。利活用のイメージができる資料は、必要に応じて新たな収蔵スペースや整理にあたる人員を確保する努力も辞さず、積極的にエネルギーを割いて収集し資源化すべきだと思っている。そもそも人物資料の収集にバイアスはつきものであり、まったく異論のない収集はまずありえない。第一の点がクリアされるのならば、第二・第三の点は第一に従属する側面であるとさえ筆者は考える。

利活用の最終目標は様々な手法による公開である。担当者の利活用ばかりではなく、資料の資源化と公開を通して、当該人物資料が、どのような学内外の需要（組織アーカイブズの代替需要・レファレンス需要・展示需要・外部研究者の需要等）を満たすのかを慎重に検討した上で、その収集を見きわめるべきなのはいうまでもない。

人物をめぐる知識などの無形情報についてもいささか触れておく。ここまで述べ来たったのは有形の資料である。有形の資料はスペースや整理にかかる人員が必要なことから、収集にあたって事前の検討を要する。しかし無形の情報に関しては、スペースが必要なわけではない。その意味では積極的な収集と資源化が可能である。

だが無形の情報は、他者と共有しない限り非常に属人性が高いものである。論文、報告書、資料集などをとじて資源構築・情報共有をしないうちに、当該の無形情報に詳しい大学アーカイブズ担当者や教員に事故が生じた場合、大学アーカイブズで有していた無形の情報は失われることになる。無形情報の資源構築については、定まった方法があるわけではないが、現在はクラウドドライブ等を活用した情報の共有化・可視化に様々

な手法があるので、メモでも写真でも取得した無形情報の資源構築を図っていくことが重要であろう。

さて、前記のような検討を経て収集した人物に関連する資源をどのように公開するか。展示の側面から次に考えてみたい。

三 大学アーカイブズにおける人物展示の目的・意義・対象・波及効果

大学アーカイブズで構築した有形無形の資源を展示する目的とは、第一義に公開である。つまり、所蔵されている各種資源を展示をとおして公開し、その「意義」を内外に幅広く知らせることが主目的となる。ここにいう「意義」とは、資源そのものの歴史的・社会的意義である場合もあるし、親機関たる大学をめぐる様々な意義が含意される場合もある。

大学アーカイブズの資源は、貴重な美術品や文化財ばかりではない。学内関係者には重要でも、外部のステークホルダーには、なにが重要なかわからない資源も大学アーカイブズには数多い。逆にいうと、資源により、意義を感じる層と、それほど意義を感じない層があるということになる。

そのため、当該の資源が展示に堪えるかどうかを十分検討するのはもちろんのこと、その資源を通して①どのような意義を知ってほしいのか、②それをどのような対象に発信したいのか、③資源を展示した結果どのよ(9)うな波及効果を生むのか、について十分留意する必要がある。それらを例示としてまとめたのが表1である。

今回主題とする人物に関していえば、創立者については、その展示を通して、表の項目Ⅱにある大学の理念や教育研究方針の意義を知ってもらいたい。意義を発信したい対象は社会一般・学生・教職員・将来の大学志

表1 大学アーカイブズ展示における意義・対象・期待される波及効果の例示

項目	資源の公開を通して知ってもらいたい意義	意義を発信したい対象	期待される波及効果
I	資源の歴史的重要性	社会一般	大学の知名度・ブランディング向上
II	大学の理念・教育研究方針（創立者の紹介含む）	社会一般・学生・関係者・将来の大学志願者	大学の知名度・ブランディング向上、学生・教職員の意欲向上
III	大学の各種施策の挙証資料	学内	学内諸機関の施策立案の根拠として利用
IV	人類社会の持続的発展に貢献する多様な輩出人材・関係者（学生・卒業生・教職員）	学生・卒業生・関係者・社会一般・将来の大学志願者	大学の知名度・ブランディング向上、卒業生・学生・教職員の意欲向上
V	地域・産学貢献	地域・企業・大学	地域・産学連携推進
VI	新たな課題の推進	社会一般	「新しい生活様式」「SDGs」などへの取り組みアピール

願者であり、資源展示の結果、大学の知名度・ブランディング向上、学生・教職員の意欲向上への波及効果が期待される、といったものである。

顕著な活躍をした学生・卒業生・教職員はどうか。その展示を通して、表の項目Ⅳのように、人類社会の持続的発展に貢献する多様な輩出人材・関係者の意義を知ってもらいたい。意義を発信したい対象は学生・関係者・社会一般に加えて卒業生である。期待される波及効果は、大学の知名度・ブランディング向上、学生・教職員の他に卒業生、将来の大学志願者の意欲向上が予期できる、といったものである。

なおこの表の項目Ⅱの知ってもらいたい意義「大学の理念・教育研究方針（創立者の紹介含む）」において、意義を発信したい対象として卒業生を含めていないが、この情報が

卒業生の意欲向上に寄与しないということではない。創立者が著名な一部大学に比べると、一般に、卒業生が創立者についての知識を持っていないことが多い。そのため卒業生にとつては、より身近な他の卒業生・学生・教職員の展示が相対的に意欲向上に資すると思料し、この図の項目Ⅱでは卒業生を含めなかった。むしろそれは各大学の来歴や展示構成によって変化するものである。

四 人物関係資源の蓄積と展示の事例——明治大学の場合

人物展示の実際について、筆者の所属する明治大学史資料センターを例にとつて紹介していこう。

(Ⅰ) 明治大学の人脈と明治大学史資料センター所蔵の人物に関する資源

まず明治大学に関連する人物の傾向を時期別に整理しておく。

A 創立期（一八八一年—一九〇〇年代初頭）

明治大学は一八八一（明治一四）年に、岸本辰雄（一八五一—一九二二）、宮城浩蔵（一八五二—一八九三）、矢代操（一八五二—一八九二）の三名により明治法律学校として創立した。当初は法律単科を教授する学校であり、教員は法学者が中心で、そこで学び卒業した人々は法曹をはじめ、官吏の道に進むものが多かった。

主な人物資源例 ①創立者、②草創期教員、③著名卒業生（法曹・官吏等）④当時の現役学生

B 総合大学化（一九〇三年—第二次世界大戦前）

創立から二〇年あまり、法律単科の期間が続いたあと、産業構造の転換に対応して設立した商学部（一九〇三年）により、設置科目が増設されて経済・商業系数多くの教員が教壇に立ち、実業の成果に進む人材を輩出していくことになる。政治経済学部（一九二五年）、文学部（一九三二年）などの設置をとおして大学は総合大学化を果たし、政財界、文化・芸術などへの輩出人材の多様化が進む。関東では珍しい社会科学系の高等女子教育を施す専門部女子部（一九二九年）の設置により、女性初の法曹やキャリア官僚を輩出した。

こうした総合大学化と人材の多様化は、明治末期から大正期にかけて、学生活動の活発化を招来する。明治大学に限った話ではないが、この時期多くの大学でスポーツや各種文化系サークルによる課外活動が盛んになり、学生時代の経験を生かしてスポーツなどで世界的な実績を残す人物も出てきた。

主な人物資源例 ①設置学部教員、②著名卒業生（実業家・政治家・作家・スポーツ選手・社会進出する女性卒業生等）、③当時の現役学生

C 新制大学以降（一九四九年―現在）

第二次世界大戦をはさみ、工学部（一九四九年設置 前身の明治工業専門学校は一九四四年設置）、農学部（同 前身の明治農業専門学校は一九四六年設置）が置かれ、自然科学系の人材養成が開始される。経営学部（一九五三年設置）が置かれ、高度経済成長を控えた時期のビジネスパーソン養成が図られていった。二世紀に入り、二〇〇四年におよそ五〇年ぶりとなる情報コミュニケーション学部が設置されたことを皮切りに、二〇一二年に国際日本学部、二〇一三年に総合数理学部が設置され、様々な分野において新たな時代の要請に対応した人材育成に着手している。

主な人物資源例 ①設置学部教員、②著名卒業生（実業家・政治家・作家・芸術家（人間国宝）・映画監

督・俳優・研究者・技術者・スポーツ選手……様々な分野で活躍する人物)、③当時の現役学生

非常にラフであるがこのように整理を試みた。Aの創立期は法律単科を教授する学校であったから、関係者は法学者が中心で、卒業生も法律家か公務員になる者が多かった。それがBの明治30年代の総合大学化を契機に人材が一挙に多様化していく。連動して学生課外活動が活発になり、卒業後も引き続きスポーツや文芸活動などで主導的な役割を果たす人物を輩出していくようになる。Cの第二次大戦後になると理系学部が設置され、戦後復興・高度成長期をとおして急速に求められるようになってきたテクノロジーをめぐる諸課題に対処していく。社会の変化に対応して新学部設置が進められ、さらに人材は多様になる、といった明治大学の歴史と輩出人材との関連が認められる。

Aの時期における明治大学史資料センターの人物関連資源は、まず創立者および草創期教員関係資料である。だが実は、明治大学には創立者の関係資料はほとんど存在しない。肖像写真は若干所蔵があり、著書や講義録の多くは所蔵があるものの、創立者の展示で使用されるイメージのある文書類と物品は、創立者三名分を合わせても自筆文書がわずか二点(岸本一 宮城一)、他に辞令(矢代操の元老院辞令など若干)、物品に至っては一点(伝宮城衣服)しか残されていない。草創期明治法学校で教壇に立った創立者たちの知己である教師たちの資料も、若干著書や講義ノートなどが残されるが潤沢とはいえない。創立者のうち二人が天逝したことから、明治大学の立地する神田地区が関東大震災の被害にあった影響も受けていると考えられる。それを補完すべく、沿革史『明治大学百年史』(全四巻、一九八六―一九九四)編纂期から現在まで、創立者の生誕地や関係故地などの調査を複数回実施しているが、遺物類の収集はほとんど叶わず、主として無形の知識情報の収集にとどまっている。この点豊富に創立者の遺物を資源として所蔵する大学と比べると実に貧しい状況だといえ

る。

卒業生資料はどうか、草創期の卒業生で、大学事務方のトップとして、学監を長くつとめた田島義方（一八五八―一九三八）関係資料、大審院検事を務めた早川彌三郎（一八六九―没年未詳）関係資料などが若干残されている。内容は写真、卒業証書、事例類、私文書類若干である。長く大学で事務を取り仕切った田島の資料のなかには、他の資料にはない学則類などもあり、組織（機関）アーカイブズの補完にもなっている。

草創期の学生資料としては、学生の講義筆記ノートや、他の文書館等で所蔵する日記等の複写があるがそれほど多数ではない。Aの時期については、人物展示の実施を担保するに十分な資源があるとはいえない。そのため、展示によって創立者および草創期の人物を紹介する際には、出身地や履歴などの無形情報、そして本人の写真や著書、さらには草創期の大学の様子を表す資料などを組み合わせる内容になることが多く、物品類の提示がほとんどできないのが実情である。

Bの時期になると、徐々に資源が増えてくる。筆者の設定した区切りが明治三〇年代から昭和戦前までと幅が約四〇年と広いのもあるが、著名卒業生資料で一〇〇点以上の資源を所蔵するものとしては、大審院判事をつとめた尾佐竹猛（一八八〇―一九四六）関係資料、人権派弁護士として知られる山崎今朝弥（一八七七―一九五四）関係資料、時代小説作家佐々木味津三（一八九六―一九三四）関係資料などがある。とりわけ、五万点以上を超える規模なのが元内閣総理大臣三木武夫（一九〇七―一九八七）関係資料である。内閣総理大臣経験者の文書を体系的に大学で所蔵しているケースは珍しく、同資料はオンラインデータベース化された¹⁰。また同資料受入の際には、新たな収蔵施設の増床とその整理にあたる担当者の増員を図った。

また、この時期の教員資料としてめぼしいのは、二〇二〇年に寄贈を受けた、明治大学総長や極東国際軍事

裁判で日本側弁護団長をつとめた鶴澤總明（一八七二—一九五五）関係資料である。資料点数としては七〇〇点近くに上り、冊子体の寄贈資料目録を刊行した。⁽¹¹⁾だが他方でこの時期の教員資料については規模の大きいものはなく、あっても一名あたり数点から数十点の範囲にとどまっている。

学生資料としては、盛んになってきたスポーツ関係の資料（メダル・バッジ等）や、出陣学徒関係資料がある。

Cの時期で規模が大きい資源は、教員資料としては元明治大学長木村礎（一九二四—二〇〇四）関係資料、著名卒業生資料としては作詞家・作家阿久悠（一九三七—二〇〇七）関係資料がある。いずれも一万点を超える規模である。前者の資料には学内ですでに失われている会議体の記録などがあり、組織（機関）アーカイブズの補完となっている。また、木村が専門としていた日本近世村落史の教育・研究に関する資料が多数残されている。阿久資料の収集・整理にあたっては収蔵施設の増設と書架の整備、整理にあたる人員の増員を実施した。教員資料としては、一〇〇点を超える規模の資料もいくつかあり、今後の工夫として展示による公開を図ることも可能ではないかと考えている。学生資料としてはサークルや部活、各種国際大会など、スポーツで活躍した学生関連資料の比重が高いがあまり点数は多くない。

以上、明治大学史資料センターにおける人物関連の資源について紹介した。収集アーカイブズの性質上、時期ごとにバランス良く悉皆的に収集、資源化しているわけではなく、特定人物の資料が突出して多いのがみとれる。また創立期の人物に関する資源が極端に存在しないのも特徴的である。

繰り返し返すように、大学アーカイブズの展示はそこで有する資源に規定される。人物に関する限られた資源を活用してどのような展示を、いかなる対象に、どのような効果を期待して行ってきたか、明治大学での取り組み

みを以下に紹介していくこととする。

(2) 創立者の企画展示

明治大学として本格的な歴史展示を行ったのが一九九三(平成五)年における「明治大学の歴史展」である。⁽¹²⁾これは『明治大学百年史』完結を翌年に控えた段階で実施されたもので「大学資料館」⁽¹³⁾開設の実現を企図したものであった。以降二〇〇四(平成一六)年の常設展示施設である大学史展示室開設まで断続的に企画展示を実施している。一九九五年の明治大学旧記念館の取り壊しに伴って実施された「明治大学記念館歴史展」、一九九八年に竣工した新校舎リビタィタワーで実施した「明治大学歴史展」、二〇〇一年の「明治大学創立一二〇周年・創立者生誕一五〇年記念展」であった。これらは大学の編年展示にキャンパス、人物など若干のテーマ展示を織り込んだもので、いずれも人物を正面から取り扱った展示ではなかった。二〇〇一年の展示においては、創立者や卒業生についてのコーナー展示も設け、トピックスを重視した構成となったものの、人物を主題とした企画展示ではなかった。企画展示に相当するものとして、一九九九年から大学の事務局が入った建物のロビー前で小さな展示を実施しており(「明治大学小史展」と称していた)⁽¹⁴⁾、そこにおいて、人物資源をテーマとした展示を時折実施していたが、大規模展示のなかで人物を取り扱うことはなかった。それには、常設の編年展示がないことも影響していたように考える。常設の編年展示施設がベースとして存在しないため、担当者としては、企画展に編年展示の要素を入れ込みたくなる。逆に編年展示を行っている常設施設が存在していれば、担当者は企画展での編年展示の組み入れを気にせず、人物やその他の様々な大学に関わることを主題にできる。



写真 1 大学史展示室

編年での常設展示は、二〇〇四年に至り明治大学アカデミーコモン内に設置された大学史展示室（写真1）により具現化した。創立者やシンボリックな建物を紹介するコーナーとともに、編年での展示構成が図られたのであった。

それを受けて、さっそく同年、創立者の一人である岸本辰雄を主題とした展示を実施している（「明治大学創立者 岸本辰雄展」鳥取市文化センター）。当時の担当者であり、大学史料センター事務長であった鈴木秀幸が立案したもので、大学内に常設展示室ができたので、あえて学外での展示を企画し、創立者の生誕地である鳥取市に会場を借りて実施したものである。展示会場の都合から、写真パネルを中心とした展示であったが、先に述べたように創立者に関する資源が大学にほとんど残されていないことから、草創期の大学関連資料を写真パネルとして、大学そのものの歩みを紹介する側面も兼ねて展示を行ったものである。前掲の展示における意義（表1）に当てはめれば、表の項目Ⅱの創立者の展示をとおして、大学の理念や教育研究方針の周知を図るとともに、項目Ⅴの地域連携・貢献への波及効果をも狙いとしたものであった。

また、この際に使用した写真パネルを再度活用し、文系教養課程の学生が学ぶ和泉キャンパスにおいても規模を縮小して展示を行った。これは主として学生や教職員への自校史教育としての意味合いを持たせたもので

ある。

以降人物展示として、同じく創立者である宮城浩蔵および矢代操の生誕地域（山形県天童市・福井県鯖江市）で企画展示の開催を継続した。二〇〇四年の展示は文化センターの一角を借りたものであったが、これ以後は地域博物館と連携し、展示を行う施設も環境の整ったものになっていった。各生誕地での展示は、二年にわけ、最初に小規模な写真展示を実施して、翌年以降に規模の大きい展示を実施するパターンをとった。また、展示会と連動して地域での資料調査や、地元研究者との情報交換なども実施していった。これは一回性の展示や調査ではなく、地域連携の持続性を一つのねらいとしていたからでもある。

これらの展示開催を年ごとにまとめると次のようになる（なおこれらの展示は主として鈴木と阿部裕樹が担当した⁽¹⁵⁾）。

二〇〇六年 岸本辰雄と明治大学——鳥取出身氏族の挑戦⁽¹⁶⁾

会場 鳥取市歴史博物館

主催 明治大学・鳥取市歴史博物館

※岸本辰雄胸像建立（鳥取県民文化会館）・除幕式とも連動

明治大学創立者 宮城浩蔵写真展

会場 天童市立図書館

明治大学史資料センター主催 天童市教育委員会後援

二〇〇七年 宮城浩蔵特別展——天童から近代を開く

会場 天童市立旧東村山郡役所資料館

主催 明治大学 天童市立旧東村山郡役所

二〇〇八年 明治大学創立者矢代操写真展

会場 鯖江市文化の館

二〇一〇年 鯖江から近代を拓いた矢代操展⁽¹⁷⁾

会場 鯖江市まなべの館

主催 明治大学史資料センター・鯖江市まなべの館

二〇一六年 岸本辰雄パネル展

会場 とりぎん文化会館

主催 明治大学

※明治大学全国校友鳥取大会と併催

先に述べたように、創立者の資源には現物資料がほとんどない。その点をカバーすべく、創立者と明治大学の草創期といった主題にしたことと、創立者生誕地との連携を意識した展示内容にしている。資源の歴史的意義を訴えかけるといふよりは、創立者ゆかりの地で大学の理念・教育研究方針の周知と地域連携による波及効果を狙った、資源がないなりに展示を構成したのが特徴であったといえる。

(3) その他の人物企画展示

創立者以外では次のような企画展示を展開している。

二〇〇六年 明大生と学徒兵

会場 明治大学博物館特別展示室

主催 明治大学史資料センター

※展示のおよそ半分を学徒兵として戦没した武石益則資料で構成

二〇〇七年 「駿台学」の体現者・尾佐竹猛

会場 明治大学中央図書館ギャラリ

主催 明治大学史資料センター

※大審院判事であり歴史家の尾佐竹猛を紹介する展示

共同研究成果刊行と合わせて開催

二〇一〇年 中田正子展——明治大学が生んだ日本初の女性弁護士

会場 明治大学中央図書館ギャラリ

主催 明治大学図書館 明治大学史資料センター 鳥取市歴史博物館

※生前鳥取市在住であった中田の展示を地元博物館と共同開催

二〇一一年 三木武夫展

会場 明治大学学生会館一階ロビ

主催 明治大学

※創立一三〇周年と共同研究成果刊行物の刊行と連動して実施

二〇一五年 弁護士・社会運動家 布施辰治展

会場 明治大学中央図書館ギャラリー

主催 明治大学史資料センター

※シンポジウム開催と連動して実施

二〇一八年 子母澤寛展

会場 明治大学中央図書館ギャラリー

主催 明治大学史資料センター・明治大学図書館

※時代小説作家の講演会と連動開催

反戦・平等論者 校友安藤正楽と明治法律学校

会場 明治大学図書館

主催 明治大学史資料センター 明治大学図書館 四国中央市教育委員会 暁雨館

※愛媛県出身の文人・芸術家のシンポジウムと連動開催

二〇二二年 安藤正楽展（予定）

会場 明治大学博物館特別展示室

主催 明治大学史資料センター 明治大学博物館 四国中央市教育委員会 暁雨館

これらの展示は、当該人物収集アーカイブズが資源として構築・公開できるようになった時期や、その人物の資源を利用した共同研究の成果を公開する時期に連動して実施したものが多く。

(4) タスクフォース型研究会——資源構築・公開の推進力

これらの展示を実施するためには、当然のことながら、対象となる人物に関する資源構築と調査研究が必要となる。その推進力となっているのは、明治大学史資料センター内に置かれた、タスクフォース型の各種研究会である。ここにおいて、明治大学史に関わる様々な研究を実施している。人物に関係する研究会としては、

「創立者研究会」(代表 村上一博センター所長〈法学部長〉)、「人権派弁護士研究会」(同代表)、「アジア留学生研究会」(代表 高田幸男センター副所長〈文学部教授〉)、「財界人研究会」(代表 白戸伸一センター委員〈国際日本学部教授〉)、「文学者研究会」(代表 富澤成實センター委員〈政治経済学部教授〉)、「三木武夫研究会」(二〇一八年から三木資料研究会と改組 代表 小西徳應委員〈政治経済学部長〉)、「昭和歌謡史研究会」(阿久悠記念館運営委員会に統合 同運営責任者富澤委員)、「安藤正楽研究会」(二〇〇七年解散)、「木村礎研究会」(二〇一四年解散)が設置されてきており、各分野に関心のある、明治大学各学部の研究者と職員との横断組織として、関係する人物の資源構築を行うとともに、論文集など研究成果を世に問うている。これらの研究会は同時併行的に行われてきており、センターにおける研究や、資源公開にあたっての大きな強みとなっている。センターにはその他にも「キャンパス史研究会」(代表 山田朗委員〈文学部教授〉)など、人物を主題としない研究会もあるが、ここに掲げた研究会の構成からは、とりわけ人物資料・情報の収集に重きを置く明治大学の大学アーカイブズの傾向が現れているといえよう。

そしてこれらの研究会では、それぞれの研究内容と、研究している人物群像を広く知ってもらうことを目的として、二〇二〇年から、読みやすい内容を心がけたリレー式ウェブコラム「白雲なびく 遙かなる明大山



写真2 「白雲なびく 遙かなる明大山脉」ウェブサイト

脈」(https://www.meiji.ac.jp/history/meidai_sannyaku/615h7p000034mdn9.html)の連載を開始している(写真2)。このウェブコラムを蓄積して、いずれ分野別の刊行物として発行し、人物の紹介をとおして、研究面はもとより、大学の歴史や理念といった様々な側面を、学内外の幅広い層に知ってもらうことも目指している。

かつてセンターでは右記研究会メンバーにて分担執筆し、創立以来の明治大学の関係者・卒業生一〇〇名あまりを選定・紹介した『明治大学小史 人物編』(学文社、二〇一一年)を刊行した実績もある。こうした人物を中心とする収集アーカイブズの資源化に関わる事業を、これら研究会が推進し展示事業の実現にも寄与してきたといえる。

(5) 常設施設・阿久悠記念館(二〇一一年)、

鶴澤総明文庫・同展示コーナー(二〇二二年)の開設

ここまで紹介してきたのは、人物にかかわる企画展示である。それに対して、常設展示施設として開設したのが、阿久悠記念館(明治大学アカデミーコモン地下一階)(写真3)、鶴澤総明文庫(明治大学学生会館四階)及び同展示コーナー(明治大学アカデミーコモン地下一階大学史展示室内)である。



写真3 阿久悠記念館

両者の設置の間にはちょうど一〇年の間隔がある。阿久悠記念館の基礎となる阿久悠関係資料が明治大学に寄贈されたのが二〇一〇年、鵜澤總明文庫・同展示コーナーの基礎となる鵜澤總明関係資料が寄贈されたのが二〇二〇年で、それぞれ翌年までに資源化を終わって常設施設が設置される運びとなった。これは二〇一一年及び二〇二一年が明治大学の一三〇周年、一四〇周年にあたっており、資料の受け入れ翌年までに資源化を図り、周年事業の一環として常設施設を開設するスケジュールが決まっていたことによる。

阿久悠は昭和歌謡の巨人として一時代を築いた人物である。ピンク・レディーを筆頭に、誰もが知る大ヒット曲を多数作詞したことは多言を要さない。その阿久が明治大学出身であることは意外に知られていない。ところが阿久は、自身の作品等でその学生時代と母校・明治大学への愛着を饒舌に語っている。高校時代に校歌が好きだから明治大学に進学を希望する、と進路指導の教員に答えたというエピソード⁽¹⁸⁾があるほど、明治大学に愛着を持ち、学生時代の経験を大切にした人物であった。

大学内に開館する施設で、しかも大学アーカイブズが展示を担当する以上は、阿久悠の業績を紹介することに加え、ぜひともこのような、阿久悠が抱いていた大学への思いを広く知らせたい。明治大学の建学精神といわれる「権利自由」「独立自治」が歌詞に編み込まれ、多くの明治大学関係者に今日まで親しまれている校歌の息吹を吸収し、青春時代を過ごした阿久が、そのことも糧として昭和歌謡の巨人

となったことを来館者にぜひ紹介したい、と考えた。

そこで阿久悠の人と巨大な業績を紹介するのに先立って「明治大学と阿久悠」というコーナーを設けた。阿久悠が過ごした時代の明治大学と、その学生時代を紹介することから記念館の展示をスタートさせることとしたのであった。大学が輩出した人材の紹介を図るとともに、それらの個性を育んだ大学の存在を周知させることも、阿久悠記念館の展示において心を配った点である。二〇二〇年からのコロナ禍で来館者数にブレイキがかかっているが、阿久悠記念館は開館以来、毎年二万人超の来館者がコンスタントに訪れる施設となった。阿久の業績と、阿久を育んだ摇篮としての明治大学をつなぐ施設として今後も展示を充実させていきたいと考えている。

一方鶴澤總明は、戦前戦後にかけておよそ一〇年あまりにわたり明治大学総長をつとめたばかりでなく、明治大学付属明治高等学校・中学校の前身である明治中学校初代校長にも就任するなど、今日の明治大学の礎を築いた人物である。また弁護士、貴族院議員、衆議院議員、そして法哲学研究者として、様々な側面で大きな足跡を残している。鶴澤は明治大学に講師として迎えられてからその死去まで五〇年以上も大学に関わり続け、その期間は創立者をも凌駕していることや、その業績の大きさから、創立者に対するよりも鶴澤への印象を強く持っている卒業生も少なくない。日記をはじめとする資料はすでに国立国会図書館憲政資料室に寄贈されており(二〇二一年三月公開)¹⁹、大学史資料センターでは遺族から著書を始めとする資料の寄贈を受けたものである。これを受け、センター内人権派弁護士研究会と事務局(担当阿部裕樹)により、資料の検討と資源化を進めて『鶴澤總明文庫目録』(二〇二二年、非売品)を刊行するとともに、鶴澤に関するはじめてのコンパクトな評伝『鶴澤總明と明治大学』(DTP出版、二〇二二年。明治大学創立一四〇周年記念事業成果物(非売品))

をまとめるにいたった。

阿久悠の場合と異なり、鶴澤資料の場合は、資源化した資料目録を刊行し、寄贈をうけた資料を文庫内に配架して、研究者に対して公開を図るのがメインであり、展示の比重はそれほど大きくない。しかし大学史展示室の一角に鶴澤の蔵書などの資料が置かれることにより、明治大学の今日の基礎を築いた鶴澤とその事績への関心の惹起を期するものである。

(6) 「校友山脈」で過去・現在・未来をつなぐ——卒業生の総合的展示の試み

二〇二一年開催した企画展示「校友山脈——明治大学の人材と教育」(明治大学創立一四〇周年記念事業・二〇二一年度明治大学博物館特別展 会期 二〇二一年七月三日から十一月三日 会場 明治大学博物館特別展示室)において、明治大学の人物展示における将来像の提示を試みた。そのことを紹介して本節を締めくくりたい。

実施してきた明治大学史資料センターの人物展示において、ひとつの憾みとしてきた点がある。これまで故人しか紹介できていなかったことである。二〇〇一年の創立一二〇周年展示の際に、わずかに、現在活躍する卒業生の資料(作家の作品や文化・芸術家の作品、スポーツ選手のサインなど)を取り上げたのみであった。さきに触れた『明治大学小史 人物編』においても、同書に収録した人物は村山富市元首相を除いて、すべて故人である。

しかし大学アーカイブズで収集するのは故人の資源ばかりではない。また故人でなくては歴史化されず、展示の対象として取り上げ得ないということでもない。

これは展示担当者の責に帰する点もある。実際のところ日本の大学アーカイブズの資源構築に携わる担当者は広く史学を学んできた者が多い。自戒も込めていうと、これまで学んできた経験から、どうしても比較的古い時期の資料の資源化や公開に拘泥しがちである。また、こうした担当者のそもそもの資質とは別に、近年に活躍した人物、ましてや現在活躍する人物の資料を収集して資源化し、公開するのに躊躇を伴うのも確かである。資料に残っている個人情報保護の問題などもさることながら、故人の資料でも収集・公開基準が定まらないのに、現在存命で活躍する卒業生資料となれば、何を根拠に収集し、公開・展示の対象とするのか、説明をつけるのは難しい。

ところが実際に、古い時期の人物資源を活用して公開をしてみると、学内外から、古い時期の学校や人物のことがわかってよかった、という声を受ける一方で、もっと近年に活躍した人物の資源公開・展示を望む声も聞かれるのである。

大学アーカイブズに対して寄せられるこのような需要に応える必要があるのではないかと、筆者は考えるようになった。筆者は、大学総体の歴史を記録保存する大学アーカイブズの資源は、利活用次第では大学のステークホルダーすべてに資すると考えている。需要の一半に応えられないのは大学アーカイブズの存立意義に関わる。その思いもあり、かねて人物展示をする際に現役世代の活躍も紹介できないかと考えていたのである。そこで創立一四〇周年にあたる二〇二一年に、数多くのステークホルダーに資することを期して展示会を実施することとした。

明治大学のステークホルダーとして最も母数が多い存在とはなにか。それは「校友」である。明治大学において校友とは、卒業生と、在職年数など一定の条件を満たした教職員及び関係者のことを指す。明治大学では

創立翌年の一八八二年から校友名称の使用を開始している。校友名称を使用したのは明治大学がもっとも早いともいわれる⁽²⁰⁾。校友の比率でもっとも大きいのは卒業生である。二〇二二年現在、創立以来の卒業生数は五八万人を超える。周年事業の機会に、より多くの人々と、明治大学がいまある喜びを分かち合い、大学のさらなる持続的発展を期すべく、校友に対して訴求効果の高い展示内容とすることが、主目的になると考えた。

そして同時に、明治大学関係者以外の外部の人々、とくに将来明治大学に学ぶ可能性のある志願者にも強く訴えかける内容にしたいとも思料した。周年事業は内部のお祭りの要素が強く、なかなか外部からの注目を受けづらい印象がある。せっかく展示を行うので、内部向けの展示と思われないよう、展示の内容を工夫して、大学から輩出した人材や、人材を育んだ大学の教育について、関係者以外にも広く紹介する機会にもしたいと企図したのである。

展示のタイトルは「校友山脈——明治大学の教育と人材」とした。卒業生五八万人を重畳する山並みに擬えてみた。一四〇年を閲して、日本の社会基盤整備に貢献した、明治大学の輩出した人材が、圧倒的なスケールで日本近代史上に重畳する姿をイメージしたものである。山脈には、個々の人間存在を超え持続するイメージもある。個々の校友の個性を寄せ集め、過去から現在、そして未来へとつながる〈山脈〉という集合体を仮構することに、明治大学最大の存在を可視化したつもりである。

展示にあたっては以下のような方針を立てた。

- ① 展示で取り扱う校友の範囲は、明治法律学校及び明治大学卒業生（一部中退者含む）とする。
- ② 各界で活躍してきた創立期からごく最近までの校友を一つの会場で、可能な限り多数、紹介する。来館者が感嘆するような圧倒的なボリューム感をもたせることに留意する。



写真4 校友紹介パネル例(三木武夫)

社会で活躍する側面を紹介したかったからである。

②については、校友の卒業後の進路を法曹、政界・財界、文化・芸術、スポーツの四分野に区分した。そのなかから、故人・存命問わず代表的な人物を選定して紹介候補とした。紹介する人物は全学的にオーソライズされたものではなく、展示を担当する博物館・大学史資料センターレベルで決定した。そのため、今回の展示限定で、あくまで博物館・大学史資料センターが選定した人物と明示することにした。併行して、本人や関係先に展示への協力依頼を進めた。

具体的な人物の展示方法は以下の通りである。写真4のように、本人写真とその事績に関する簡単なキャプションを配した一人一枚の校友紹介パネル(A3判)を展示室の壁面いっばいに掲示することにした。パネルを貼り付ける壁面として、博物館特別展示室で最大サイズのガラスウォールケース(幅約一〇メートル×高さ二・五メートル)を目隠しし、その前に仮設壁を造作設置した。この壁一面を覆った校友紹介パネルがメイン

- ③ 校友をはぐくんだ明治大学の教育を紹介する。
- ④ 特定の分野で活躍した校友複数名を展示するコーナー展示を実施する。
- ⑤ 新型コロナウイルス感染症対策として、来館が叶わない方向けの映像コンテンツを制作する。
- ① に関していえば、厳密にいうと教職員も校友であるが、視点が拡散しないよう、今回の展示では卒業生のみを取り扱うこととした。明治大学の教育を受けた輩出人材が

表2 校友山脈展示で紹介した人物の卒業時期分布と分野別人数

(単位：人)

校友の卒業時期	法曹	政界・財界	文化・芸術	スポーツ
A 創立期 (1881～1902)	5	1	—	—
B 専門学校令から旧制大学期 (1903～1948)	7	5	11	6
C 新制大学期 (1949～現在)	9	11	35	15

の展示となる。展示室で最大のケースをつぶして壁をつくったことで明らかのように、今回の展示においては、校友に関する有形の貴重資源をメインとするのではなく、これまで大学アーカイブズで蓄積してきた無形の校友に関する情報と、その校友の顔写真を何よりの資源として展示の構成を試みたのである。

ガラスウォールケースと同等の大きさである幅一〇メートル×高さ二・五メートルの仮設壁には、A3パネル三段で掲示できる最大数一〇五名分の展示パネルを作成することとした。五八万の校友のなかからではきわめてわずかであるが、この展示室で掲示できる限界としての人数設定であった。一〇五名の卒業時期と分野別人数を示したのが表2である。創立期は卒業生の数も少ないので、あとの時期との比較は難しい面もあるが、著名校友として知られている人物は法曹がほとんどである。それが、旧制専門学校令から旧制大学に至る過程で、その比率が落ち、法曹、政界・財界、文化・芸術、スポーツに輩出人材が分かれていく。そして戦後になると、その傾向はますます強くなり、文化・芸術の分野に多数の人材を輩出していくことになる。ただ今回の展示で紹介した人々が、実際の卒業生の分野別輩出割合を反映しているものでももちろんない。今後の同種の人物展示を実施する場合において、どのような時代や分野での輩出人材を紹介することに重きを置くかで紹介割合の変動が生じていくことになるはずである。

なお紹介した一〇五名中故人は四二名であり、六割が現在活躍する校友という



写真5 校友山脈紹介パネル展示の様子

比率となった。この展示で紹介した人物のなかでもっとも生年が早い利光鶴松（一八六四—一九四五 小田急電鉄などの創業者・弁護士・政治家）ともっとも若い児玉雨子氏（作詞家）との間の生年差には一三〇年近くの開きがある。明治大学創立以来の輩出人材を同一平面上に並べ、一覽できる点も本展示の特徴の一つといえる。

先に述べたように、今回の展示は無形の情報と写真がメインである。そのため、来館者に興味をもっていたく材料としては、いわゆる「あの人も、この人も明治大学出身なんだ。すごい！」という、その人物の揺るぎない業績と、展示の造作によることになる。

前者については、いずれも日本の各分野で大きな足跡を残している校友であるため心配はなかったが、後者が貧弱だと、来館者に満足感を持っていただけなばかりか、展示へのご協力を快諾をいただいた校友各位にご迷惑をかける可能性もある。そのため展示造作にはだいたいぶ注力した。結果写真5のような、なかなか壮観な展示になったと自負している。

③に関しては、これら校友を育んだ明治大学の教育をセットで紹介する意味があると考えた。明治大学の教育方針の確かさと、その裏付けとしての輩出校友の山脈を、校友はもとより、明治大学を志す受験生やご父母にご覧いただきたいと考えたのである。そこで明治大学一〇学部のアドミッション・ポリシーやディプロマ・ポリシーなどに基づく学生受入方針と、学位授与方針を各学部にわかりやすくまとめてもらい、それを展示室

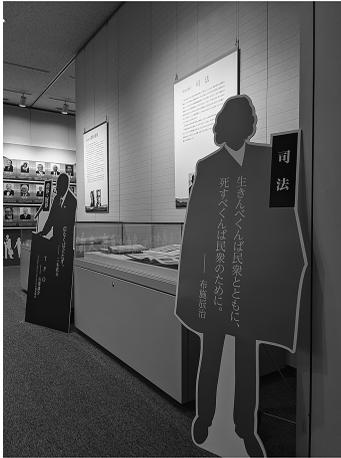


写真6 分野別卒業生の紹介では
ピクトグラムも作成

内で説明パネルとして掲げるとともに、学部創立時と現在に関わりのある資料を配置してその歴史を振り返るコーナーを設けた。

④においては、「ご存じ！ 明治大学時代小説家の系譜」と題したコーナー展示を行った。明治大学は大正・昭和期のポップカルチャーを先導した時代小説作家を多数輩出している。そのなかで代表的な作家として知られる子母澤寛（一八九二—一九六八）、「座頭市」「新選組始末記」など、佐々木津三（一八九六—一九三四）、「旗本退屈男」「右門捕物帖」など、富田常雄（一九〇四—一九六七）、「姿三四郎」「武蔵坊弁慶」など、五味康祐（一九二二—一九八〇）、「喪神」「柳生武芸帳」などの人物と業績を紹介した。とくにこの四人は大正期からの各種メディア発達と関連が強く、作品の多くが映像や舞台化されている。今回の展示では、数多くの俳優により映画・テレビで演じられている「座頭市」など、映像化作品の紹介を重点的に行った。

二〇二〇年から全世界を襲った新型コロナウイルス感染症の流行により、展示会をはじめ、人が外出して体験するイベント開催に大きな制限が出ているのはいまさら述べるまでもない。つぎつぎとイベントが中止されているなか、今回の展示を開催できただけでも幸甚ではあった。しかし明治大学志願者が多数来校する予定であった八月のオープンキャンパス、卒業生が訪れる予定だった一〇月のホームカミングデーの対面開催が中止となり、やむを得ぬこととはいえ、多くの方々に来館いただける機会を逸したのは残念な次第であった。



写真7 校友山脈 明治大学140→150周年
150人の卒業生たち

展示を観覧いただくことが使命の博物館・美術館にあっては、多くの業種と同様、現状の事態はその事業の根幹に関わる死活問題である。昨年からは北海道博物館が発起人となり、現在は二三〇のミュージアムが参加する「おうちミュージアム」(<https://www.hm.pref.hokkaido.lg.jp/ouchi-museum-list/>)事業では、各館がSNSや映像・画像等を活用して、その欠落を埋める努力を払っていることが一覽できる。明治大学博物館においても「おうちミュージアム」に参加し、昨年から収蔵資料の映像での紹介や、バーチャルミュージアム、そしてツイッター、インスタグラム、フェイスブックなどSNSを活用した展示案内などの工夫をこらしている。

今回の展示を準備する段階でも、方針⑤に基づき、展示に来館できない方に「校友山脈」の意義を知っていただくべく、展示と連動した映像コンテンツを制作することにした。

それが各分野で活躍する校友一〇氏へのインタビュー映像「校友山脈 明治大学140→150周年 150人の卒業生たち」(https://www.youtube.com/watch?v=YwM15cGskE4&list=PL8bCC-xrDXMSeM4zda3wn4MOEwE7LWVU&ab_channel=MeijiUniversity)である(監督 守屋健太郎氏)。インタビューに登場いただいたのは次の各氏である(卒年順)。北野大氏(明治大学校友会長 秋草学園短期大学長)、池端俊策氏(脚本家)、立川志の輔氏(落語家)、三田紀房氏(漫画家)、野村達矢氏(ヒップランドミュージックコーポレーション社長 日本音楽制作者連盟理事長)、片倉正美氏(EY新日本有限責任監査法人理事長)、加藤正俊氏(テレビドラマプロ

デューサー）、高橋知典氏（弁護士）、三澤世奈氏（江戸切子職人）、児玉雨子氏（作詞家）。いずれも日本社会の各分野第一線で活躍する方々ばかりであり、この顔ぶれからだけでも明治大学校友の多様さと層の厚さを窺うことができよう。同映像でインタビュアーと監督をつとめた守屋健太郎氏も明治大学の校友であり、数多くの映画作品・テレビドラマ、CMやミュージックビデオ作品を手掛けている。いわば「オール明治」により完成したインタビュアー映像では、出演者が口々に、明治大学の学生時代の経験が現在のキャリアの基礎になっている、と感慨深げに述べていることがきわめて印象的であった。

本映像企画は、コロナ禍だからこそ案出したものであるが、コロナ禍での例外的な制作物にしようとは考えていない。監督の守屋氏からも熱のこもったサジェッションを受け、企画を明治大学創立一五〇周年を迎える二〇三一年まで継続し、最終的には一五〇名規模の明治大学校友に関する映像アーカイブズとして、永く保存する計画を構想している。

さらに、SNSの使用に長けた博物館担当者が総出で、博物館の各種SNSを駆使して告知や関連記事の投稿を行い、展示の周知につとめたことも、今回の展示で得た新しい経験であった。

本展示は、現在活躍する卒業生も含めた校友山脈の紹介を通して、明治大学の過去・現在・未来を遠望する、筆者がこれまでに行ったことのない人物展示であった。手法としても映像やSNSの活用など新しい試みを行った。時間や費用、なによりコロナ禍の制約などもあり、期待した来館者にお越しいただけなかったことや、実現できないことも多かったが、紹介校友自身による会場でのギャラリートークや、VRを活用した懐かしのキャンパス散策体験など、連動して試みたいこともある。今後の総合的な人物展示への一里塚として、各種手法のブラッシュアップにつとめていきたい。

むすびにかえて

大学アーカイブズにおける展示の究極的な目的は、保有する資源の公開である。したがってその展示は、大学アーカイブズで保有する資源に規定されることになる。そのことは本稿で繰り返し述べてきたことである。しかし、限られた資源にどのような意義を見出し、そしてそれをどの対象に向けて、どのような効果を期待して発信するかは、大学アーカイブズに関わる担当者次第である。大学アーカイブズが保持する無形情報も活用すれば、展示内容は縦横に広がりを見せ、あらゆる対象が意義や魅力を感じる展示が実現できると筆者は確信している。

コロナ禍の「新しい生活様式」のなか、大学アーカイブズの展示にも変化の波は訪れている。この危機の時代で得た気づきを一時しのぎのものとしせず、次の時代への糧としたい。

注

- (1) 菅真城『大学アーカイブズの世界』大阪大学出版会、二〇一四年では、第四章に「ポスト年史編纂でない大学アーカイブズ」として、菅が携わった大阪大学アーカイブズの設立準備と理念が紹介されている。大阪大学アーカイブズは「年史編纂」と直結しないアーカイブズとして設立された。
- (2) 西山伸「大学沿革史」学校沿革史研究会編『学校沿革史の研究 総説』野間教育研究所、二〇〇八年、七七頁。
- (3) 沿革史編纂から大学アーカイブズへの転換の流れについては、全体的な潮流と『明治大学百年史』との関わりをま

- とめた拙稿「木村礎と大学史——編纂からアーカイヴズへ」明治大学史資料センター編『木村礎研究』二〇一四年所収を参照。
- (4) 筆者は沿革史編纂も含んで大学アーカイブズで構築してきた、有形の資料と無形の情報を総称して「大学アーカイブズ構築資源」と呼称している。詳細は拙稿「大学アーカイヴズ構築資源の有用性をどうアピールし社会連携するか? ——明治大学史資料センターでの経験を踏まえて——」『全国大学史資料協議会 研究叢書』第一四号、二〇一三年参照。
- (5) 自校史教育の全般的な潮流に関しては拙稿「近現代史と自校史教育——各大学における実践を踏まえて」『日本大学史紀要』第九号、二〇〇九年所収参照。
- (6) たとえば自治体と連携しながら数々の企画展示を実施してきた専修大学の事例として、瀬戸口龍一「常設展示施設を持たない大学による大学史展示の試み」『立教デイスブレイ』第三号、二〇一八年などが挙げられる。
- (7) 「大学史展の傾向について——全国大学史資料協議会会員へのアンケート結果から」全国大学史資料協議会東日本部会における筆者報告(二〇一三年三月一四日)、拙稿「大学史の〈資源〉を展示する」『立教デイスブレイ』第三号、二〇一八年参照。
- (8) 菅真城「第一講 アーカイブズ学始め」大阪大学アーカイブズ編『アーカイブズとアーキビスト』大阪大学出版会、二〇二一年所収(電子版)。
- (9) 筆者は周年事業の実施にあたってこれに相似する図を作成した。詳細は前掲拙稿「大学史の〈資源〉を展示する」三三—三四頁参照。
- (10) 『オンライン版 三木武夫寛永資料』丸善雄松堂、二〇一九年。同社によるオンラインデータベースとして最大規模を誇る。
- (11) 明治大学史資料センター編『鶴澤總明文庫目録』二〇二一年。

(12) 鈴木秀幸「明治大学史展の歩み」『明治大学史資料センター事務室報告』第二六集、二〇〇五年所収、五頁。以下の記述は同論文による。

(13) 同前。

(14) 阿部「明治大学の企画展について」前掲誌第二六集所収、四四頁。

(15) 二〇一六年の展示を除いては鈴木「創立者出身地巡回展のいきさつと今後」前掲誌、第三三集、二〇一一年所収、一五〇頁を参照した。

(16) 詳細は阿部裕樹「地方における展示の特質と意義——岸本辰雄と明治大学——鳥取県氏族の挑戦」展をめぐって」前掲誌、第二八集、二〇〇八年所収。

(17) 阿部「展覧会記録」前掲誌、第三三集所収。

(18) 阿久悠『生きっぱなしの記』日本経済新聞社、二〇〇四年。引用は二〇〇七年刊行の日経ビジネス文庫版、九二頁。

(19) 国会図書館憲政資料室寄贈資料は以下のURLで確認できる (https://navi.ndl.go.jp/kensei/mp/index_uzawafusaki.pdf)。

(20) 「蓋校友の称は、従来我邦に於て未だ有らざる所にして、此時本校の創案に係る」とある（『明治法律学校二十年史』明治法律学校出版部講法会、一九〇一年、二七頁）。この記述が正しいか、検証がなかなか難しいところであるが、他大学の沿革史で校友名称の使用開始年を閲すると、早稲田大学が一八八五年、法政大学が一八八九年、中央大学が一八九〇年に使用を開始したとされる。筆者の調べた狭い範囲ではあるが、明治大学の使用時期はたしかに古い方だといえる。

現在東京六大学では法政大学・立教大学・早稲田大学が卒業生のことを校友と称する。東京大学でも二〇一四年から卒業生組織を校友会と名称変更した。